**聖霊降臨節第16主日　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　 2024年9月1日**

**「道」**

**サムエル記下22章31節**

**22:31 神の道は完全／主の仰せは火で練り清められている。すべて御もとに身を寄せる人に／主は盾となってくださる。**

**使徒言行録18章18～28節**

**18:18 パウロは、なおしばらくの間ここに滞在したが、やがて兄弟たちに別れを告げて、船でシリア州へ旅立った。プリスキラとアキラも同行した。パウロは誓願を立てていたので、ケンクレアイで髪を切った。**

**18:19 一行がエフェソに到着したとき、パウロは二人をそこに残して自分だけ会堂に入り、ユダヤ人と論じ合った。**

**18:20 人々はもうしばらく滞在するように願ったが、パウロはそれを断り、**

**18:21 「神の御心ならば、また戻って来ます」と言って別れを告げ、エフェソから船出した。**

**18:22 カイサリアに到着して、教会に挨拶をするためにエルサレムへ上り、アンティオキアに下った。**

**18:23 パウロはしばらくここで過ごした後、また旅に出て、ガラテヤやフリギアの地方を次々に巡回し、すべての弟子たちを力づけた。**

**18:24 さて、アレクサンドリア生まれのユダヤ人で、聖書に詳しいアポロという雄弁家が、エフェソに来た。**

**18:25 彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていたが、ヨハネの洗礼しか知らなかった。**

**18:26 このアポロが会堂で大胆に教え始めた。これを聞いたプリスキラとアキラは、彼を招いて、もっと正確に神の道を説明した。**

**18:27 それから、アポロがアカイア州に渡ることを望んでいたので、兄弟たちはアポロを励まし、かの地の弟子たちに彼を歓迎してくれるようにと手紙を書いた。アポロはそこへ着くと、既に恵みによって信じていた人々を大いに助けた。**

**18:28 彼が聖書に基づいて、メシアはイエスであると公然と立証し、激しい語調でユダヤ人たちを説き伏せたからである。**



**私たちは共に使徒言行録から御言葉を聞いています。今はパウロのいわゆる第2次伝道旅行を読み進めています。15章36節から始まった第2次伝道旅行のでは様々な出来事がありました。ユダヤ人から迫害に会いました。パウロたちは投獄もされました。イエス様の十字架と復活の福音を語ってもまともに聞いてもらえないこともありました。その一方で多くの異邦人がイエス様こそが救い主であると信じてキリスト者となりました。この第2次伝道旅行は、もともとはパウロは第1次伝道旅行で回った小アジアと呼ばれる地域にできた教会の兄弟姉妹を訪ねることが目的でした。しかし、聖霊に禁じられさらにはイエス様の霊によって禁じられたために大きく軌道修正をしなければなりませんでした。そしてトロアスの港に滞在していた時に、マケドニア人の幻を示されてヨーロッパに伝道旅行に行き、福音がアジアだけでなくヨーロッパに広がるという神様の大きな御業がパウロを通してなされたのです。**

**いわば神様が備えて下さった道をパウロは常に祈りつつ御心を問いつつ歩み、その場所場所で福音を宣べ伝えたのです。第2次伝道旅行は期間は約4年、距離にすると陸路・海路を合わせると約3000キロにも及ぶ長い長い道のりでありました。その長い長い伝道の旅路が終わろうとしているのです。そして、また新たな旅路が始まろうとしているのです。**

**コリントの町で伝道をしていたパウロは、アキラとプリスキラを連れて舟でシリア州のアンティオキアに向けて旅立ちました。その途中でエフェソに寄り、アキラとプリスキラはエフェソに残しました。エフェソの町でパウロはユダヤ教の会堂で伝道し、人々からはもうしばらく滞在してほしいと願われました。エフェソはパウロがもともと行きたかったところです。それがかつてイエス様の霊によって禁じられたために行くことができなかった。今度はいくらでもいることができるのです。しかし、パウロは「主の御心ならば、また戻ってきます」と言って出発したのです。パウロは今はエフェソに留まることが御心ではないと判断したのです。そして、エルサレム教会に挨拶に行きました。これは第2次伝道旅行の報告と、恐らくはエルサレム教会のための献金を届ける為にパウロは先を急いだとも考えられています。そして、第１次伝道旅行の時も第2次伝道旅行の時も教会皆で祈り主の恵みに委ねて送り出してくれたアンティオキアの教会に帰って来ました。教会に送り出されて伝道旅行を終えて教会に帰る、教会に始まり教会に終わる、伝道が決してスタンドプレーでないことがパウロにははっきりと分かっていたのです。教会の業なのです。**

**第１次伝道旅行を終えた時パウロはアンティオキアの教会に報告をしました。**

**「到着するとすぐ教会の人々を集めて、神が自分たちと共にいて行われたすべてのことと、異邦人に信仰の門を開いてくださったことを報告した。**

**そして、しばらくの間、弟子たちと共に過ごした。」（14：27・28）**

**恐らく今回もパウロは同じように報告し、報告を受けたアンティオキア教会の兄弟姉妹は共に主の恵みを分かち合ったのでしょう。共に感謝の礼拝をささげたと思うのです。**

**パウロはしばらくアンティオキア教会で過ごしてから第3次伝道旅行に出かけました。出かける時も教会は皆で祈り主の恵みに委ねて送り出したと思います。教会の祈りに送り出されたパウロは、ガラテヤやフリギア地方に先の伝道旅行でできた教会を訪ねて教会の兄弟姉妹を力づけたのです。そして、陸路でエフェソに向かったのでした。先ほどは「御心ならば」とエフェソに留まることをしなかったパウロですが、これから向かうことが御心だと示されたのでしょう。教会共同体の中でパウロは三度（みたび）神様の備えて下さった道を祈りつつ御心を問いつつ歩んでいくのです。**

**そのように、パウロが第3次伝道旅行でエフェソに向かっている頃になるでしょうか、パウロがエフェソにはいなくてアキラとプリスキラだけがエフェソにいた時にエジプトの町アレクサンドリア生まれのアポロという聖書に詳しい雄弁家がエフェソにやって来ました。アポロについては25節で「彼は主の道を受け入れており、イエスのことについて熱心に語り、正確に教えていたが、ヨハネの洗礼しか知らなかった。」と記されています。わかったようなわからないような書き方です。「主の道を受け入れる」の「受け入れる」は「口頭で教えられる」です。主の道、つまりイエス様の歩んだ道を口頭で教えられていたのです。イエス様というのは旧約聖書が示すメシアであり、そのイエス様の教えや奇跡の業については口頭で教えられて知っていて、そのイエス様のことを熱心に正確に語っていたのだけれども、彼はヨハネの洗礼しか知らなかったというのです。洗礼者ヨハネの洗礼は悔い改めの洗礼です。やがてイエスが来られるための道備えのための悔い改めの洗礼。それしか知らない。それはつまりどういうことかと言いますと、アポロが知るイエス様の主の道は十字架も復活にも至らない道だったのです。イエス様の十字架の死と復活によって、そのことを信じるだけで義とされて救われるという最も大切なことにまで至らない、いわば道半ばの信仰と言えるのです。「イエスというメシアが来られた。だから悔い改めよ。さもないと神の裁きを受ける」恐らくはそんな感じのことを雄弁に大胆に宣べ伝えていたのでしょう。**

**その説教を聞いたアキラとプリスキラはかつてパウロから聞いていた主の道とは異なることに気が付いたのです。彼らはアポロを自宅に招き入れてもっと正確に神の道を説明したのです。神の道、神様が私たち人間を愛して下さりこの世界を愛して下さり、救いのために神様が備えて下さった道です。神様が愛する御子を十字架に掛けてまで私たちを愛して下さり、その死と復活によって私たちの罪を赦し、私たちを永遠の命に招いて下さっている道です。「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとにいくことができない」（ヨハネ14：6）とイエス様がおっしゃられた永遠の命に至る道、私たちがその道を通るように招き導いて下さっている真理であり命の道、その道のことをアキラもプリスキラも非常に丁寧にアポロに解き明かしたのです。聖書には書かれていませんがおそらくそこで聖霊が働いて下さったのでしょう。アポロは今まで道半ばだったけれども、主の道、神の道を正しく理解して信じるようになり、アポロも神の様が備えて下さっている道を歩み始めたのです。**

**そしてアポロは神様が備えて下さっている道をより多くの人が歩んで欲しいと願ってアカイア州のコリントに向かうことを決めました。アキラたちはそしてエフェソの教会の人々はアポロを一人の伝道者として立てて主の恵みに委ねて送り出したのです。ちょうどパウロが第１次及び第2次伝道旅行に出発する時のアンティオキア教会のように、エフェソの教会はアポロを送り出したのです。アポロはかつてパウロが立てたコリントの教会でまた恐らくはユダヤ教の会堂で神の道を宣べ伝えたのです。コリントの教会の伝道の業の大きな力となったのです。**

**こうして、アポロがアキラとプリスキラのさらにはエフェソの教会の働きでまた交わりの中で一人の伝道者として立てられて育てられたのです。それはパウロが教会によって送り出されたのと同じです。伝道は決してスタンドプレーではありません。一人旅ではありません。教会共同体として神様が備えて下さっている道を祈りつつ御心を問いつつ歩んでいくのです。**

**改めて私たちは教会の大切さを思うのです。私たちは神様が備えて下さっている神の道を今歩んでいます。その道を歩む歩みはともすれば一人孤独に山道を一歩一歩歩むようなものだと思ってしまうかもしれません。前を向いても後ろを振り返っても誰もいないし誰もついて来ない、果たしてこの道でいいのだろうかと人生の迷子のように不安な思いで歩むのかもしれません。**

**けれども、私たちが歩いている道は神の道なのです。神様が私たちのために道を備えて下さり、この道を歩むように私たちを招き導いて下さっている、イエス様の十字架と復活の罪の赦しがそこにある永遠の命に続く神の道なのです。そして私たちはその道を決して一人で歩くのではなくて教会共同体として共に祈り共に御心を問いつつ歩んでいくのです。教会共同体の歩みですから、誰かがその道を外れそうになったとしても教え諭し祈って外れてしまわないように助けてくれるのです。何よりも教会は祈ってくれているのです。誰かが病のために苦しんだらその苦しみを分かち合い、回復を祈るのです。互いに愛し合い、互いに支え合い、互いに祈り合う、祈りの共同体、慰めの共同体です。そして何よりも礼拝共同体です。共に十字架と復活の主を見上げて、祈りつつ御心を問いつつ神の道を歩んでいきましょう。**